

# 富山賣藥行商圈の成立（その一）

植村元覺

## 一 序

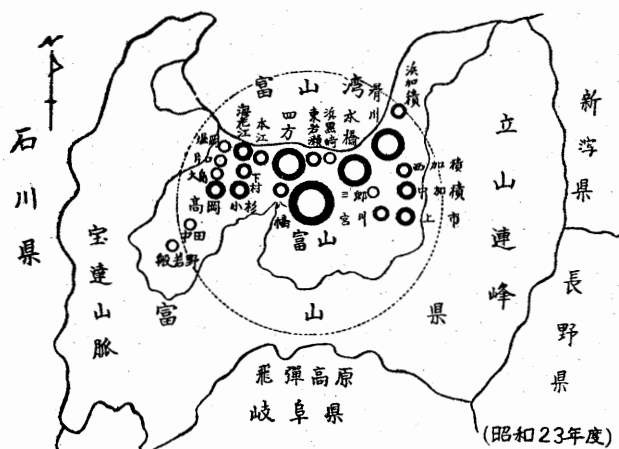
## 論

### Ⅰ 研究対象——

北陸の富山平野においては、その中央に位置する富山市とそれを衛星的に取巻く町々や農村、漁村などに、年々文字通り全国的に家庭薬の配置行商に出かける特殊な産業が栄えている。その業を営む者は「富山の薬屋さん」と云う名で全国の人々に普ねく知られている富山売薬（最近では富山家庭薬とも云う）業が即ちこれであつて徳川時代の中頃に成立し、現在に継続しているのである。序論では売薬業自体の概念とその研究方法論を明かにする事を目標とする。

これら行商人の本拠は統計によれば、旧富山市（現在の富山市は昭和十五年に外縁の東岩瀬、新庄の二つの町と近接する周縁部の豊漁村——都市化作用に抵抗しつゝ都市内で農業性、漁業性を保持している——を合併したものであるがそれ以前の市街地を主とする地域）とその東方約一二軒の平野の東端即ち「接触線」に近い上市町、次にここから北の方の海岸に向つて中加積の農村や、臨海地区の濱加積、滑川、水橋、濱黒崎、東岩瀬、及び神通川西方の四方、海老江など、更に内陸の小杉、高岡、中田などの集落が主なるものであり、ペーター・シュミットにおける空間的分布密度（Dichte der räumlichen Verbreitung）の高S「強度地帯」（Intensitätszonen）がこれに当る。<sup>(2)</sup>今この分布状態を地図に描いてみよう。そうすれば空間的分布の密度は、均一でなくその間に濃淡疎密の差がある事は勿論であるけれども、

分布の地域は富山市を中心にして大体十五軒を半径として描く円形の軌跡によつて作られる面積にほぼ一致しているの  
あてつて、この様にして劃された限界線を辿るならば、礪波地方の一部を除いて富山平野の大部分の地域がこれに包含  
せられるのを知るのである。



(富山平野における売薬行商人の分布図)

100 米の等高線をもつて平野の限界線とする

○ 2000人  
○ 700—1000人

○ 400—700人  
○ 100—400人  
○ 50人前後

北判然とした山と海の境界に取り囲まれて  
いて、極めて顕著な一つの地理的单元を成  
す平野である。(3)そこは越中米の名で知られ  
る早場米を産する単作農業地帯でもあり、  
統一ある生活圏が構成されている。然し乍  
ら地域を其の構成要素の綜合より究明しよ  
うとする者には単に斯る地形とか植物と言  
う様な個別的現象に即した分布の切断でな  
くて、諸現象の綜合的観点から統一された  
地理区を設定するのだからならぬ。  
換言すれば自然と人間が渾一体を爲すとみ  
る場所に地域を性格ある一体として考える  
のであつて、従つて單なる一定の空間的拡  
がりを指すのではなく、生ける有機体とも

言うべき意味を負うものである。ここに売薬商人の分布を焦点にして富山平野を観察するに際しても、これが他の諸現象とも合致を見出すが如くに決定することが要求される。しかしこの地域性の構造は我々の最後に明確にすべきものであるから、今茲にその特徴を追求して直ちに地域性を定める事は困難であり、寧ろ不可能に近い。唯手懸りとして大凡の輪廓を示すものに外ならない。以上の如き富山平野のこの統一的な生活圏の中で売薬業は発生し、成長したのであつた。ところが此の産業は一般に場所的に云つてこれまで旧富山市のみに立地し、其の特徴的産業であるかの様に云われ、富山は薬都とも称せられている。蓋しこれには種々の理由が挙げられるのであろうが、富山市が平野の中心的位置にあり、徳川時代から長い間引続き売薬業の核心的存在であつた事が斯様な地点性において了解されて来た一つの根拠を爲すものと考えられる。事実において發生的にはそれは旧富山市の地域から行商に出たことに由来し、最狹義の根源的範圍を形成するものであつた。然るに其の隆盛となるにつれて隣接の地域を刺戟して行商を業とする者を派生せしめて、富山藩の領地に属する新川郡、婦負郡を含む地域に拡大していき、更には加賀領であつて維新後富山県に編入された神通川の西方の地域を包含する前記の富山平野の大部分の地域において発生を見たのである。これらはいずれも時間的に近接して徳川時代に成立しており、等しく富山平野から全国行商を爲し、又同じく旅先藩より免許を受け、売薬商人としての経営の経過を一致せしめて、売薬業を形成するものであつたが、その地域には時代により拡大縮小があり、又盛衰の変遷が在つて地域的發展を認識する事が出来るので夫々の性格について調査研究する事が必要である。此の様々に地縁的見解から「位置」と「空間」と云う其の基礎的視角において、従つて経済現象を場所的束縛性 *Ortsgebundenheit* と空間的分布 *Räumliche Verbreitung* に(4)つて考察すれば、経済的立地 *Wirtschaftliche Standort* と経済地域 *Wirtschaftsgebiet* の概念が生じるのであるが今この「場所」と「空間」を基礎にして換言すれば場所的束縛を空間的拡がりに連関せしめて此の産業を究明するならば、それは実態的には地点性、局地性が遠心的に後退して、富山平野

全体の地域構造の中に其れの成立基磐を置くものとして把握される。斯て地域的性格において、從つて地域經濟の本質的構造において、この産業自体の姿乃至發展過程や政策が理解されなければならない。

次に此の地域に売薬業を成立せしめてきた因子を追求すると、この附近には原料となるに足る程の薬品及び補助原料は殆んど産しなかつたし、又現在も存しない。更にこの地域は特に政治的制約からの自由が著しく經濟活動が容易であつたとか、交通の要点にあつて輸送費が著しく低廉であつて他の地域に優越していたとも考えられない。同様に近隣に巨大な人口を持つ大都市の消費地の存在も認められない。これらはハンチングトンがその經濟地理學原理において示す商業の立地因子を構成する者であるが、この様に最も成立し易い条件と思われる原料とか消費地とか輸送費等に索引されて積極的に立地したのではなかつた事が理解される。茲に於てそれ以上の因子及びこれらの間の諸關係が探求されなければならぬ。徳川時代には、原料は国内産の和薬と中国から長崎を通じて輸入する唐薬のみであつたが、原料薬及び補助原料は殆んどすべて大阪、江戸、京都、信州或いは遠く九州辺などの各地から業者自ら行商の際に資入れて送つたのであり、就中大阪からは輸入の唐薬を買入れて来て重要な原料として売薬に生産していた。<sup>(6)</sup>此の売薬と云う商品の蒐集及び生産の機能を果す爲に売薬業の中から問屋制及びマニユファクチャが派生していた。それは商品の生産及び流通の發達によつて、流通商品の種類及び数量の増大、貨幣經濟の發展、商人資本の活躍、從つて商品↓貨幣↓資本の範疇展開に対応するものであつた事は言うまでもない。しかし維新後は和薬、唐薬の位置に代つて洋薬の使用が急増して来ると共に封建諸候の保護或いは統制からの開放が實現し、身分的、場所的制約は解体して産業は經濟的合理主義を原則とし、資本の收益率を規準にして最大の収益を挙げる地点に立地し、經營せられて地域編成に参加するに至る傾向を生じた。<sup>(7)</sup>殊に交通機關が發達して距離的制約が少くなると因習的立地に伴う特殊性は消滅する可能性を増加して来るのであり、かくて他の地域にも容易に此の種の産業が行われ易くなり、逆説的には富山の立地索引力はそれだけ衰弱し

たのであるが、原料は同じく主として大阪や東京その他から輸送せられ、加工過程を経て再び全国的に配分されていくのであつてやはり交通に依存した経営様式が持続している。売薬業がこの地域に益々発展したのはこの様な情性による事が一つの因子であると考えられ、伝統或いは地理的慣習といった要素が大きな立地の存続条件をなしているようである。斯くて売薬業存立の契機を更に吟味するためには此の産業夫自体の特色をば、次に行商の視角から項目によつて概括的に觀察する事が便宜な様である。それは凡そ次の如くである。

(一) 富山売薬業の成立は徳川時代の中期である。徳川中期は商品經濟が著しい發展を遂げ、全国的な商品の流通現象さえ見られるに至つた時期であり、富山売薬業も斯る一般的商品經濟の發達に連關して成立した諸産業の例外をなす者ではなかつた。諸藩の自給自足的藩經濟への努力に拘らず、「領域經濟は全国的流通の中へ次第に深く織り込まれていき」<sup>(8)</sup>、此の様にして封建經濟体制が「全國經濟」の經濟構造を形成したと云われる時に成立したこの産業は商業の發達段階、商品經濟の地域構造が明らかにされる事によつて始めてその本来の意義の客觀性、具体性が与えられるべきであるが、その行商範圍は一限界内に於ける濃密度及び内容には差異があるであろうが―外延においては近江商人の活躍と共に全國に足跡の至らないところは無いと云う有様であつた。売薬商人は諸藩が經濟政策を建てて領域からの物資の移出入、商人の出入、資本の移動は嚴重に統制されると共に、領域は關所、番所や山岳、河川の自然境界によつて、庶斷性、鎖境性が強く支配し、又交通機關及び制度が未發達で尙、足と肩とに多く依存せねばならなかつたのにも拘らず、各藩の内部に行商地域を拡大していつた事は全国的な商品流通から見てもその形成に果すべき使命は重要であつた。行商地域の成立するためにはそれに対する市場が前提とされ又その市場の展開が伴わなければならないが、市場の集積せる地域、乃至その分布は時代により經濟狀態、自然環境により絶えざる變動を示すであらうけれども、売薬業は現在に至るまで、約三百年間にわたり可成り恒常的に継続している。

(二) 其れを經營形態から見るに、經濟構造の變化に連關して遭遇する經營上の問題については、種々の極めて顯著な脫皮を経過することによつて自らを發展対応せしめて來たと考えられるのであるが、此を特色づける本質的契機即ち富山売藥業をして富山売藥たらしめて來た概念成立の必要條件としては、数人の行商人時には十数人の者が一定地域の得意先を毎年定期的に行商して家庭薬を預けておいて、次の行商の際には服用した分の代金を受け取り、前に預けた薬の残部を回収して、代りに新しい薬を置いていくと云う配置制度が第一にあげられる。これは行商地域の固定性をねらつてはいるが、極めて資本の零細にして且つ回転率の遅い經營組織である事を示す中で、尙保守維持されている。

(三) 右の如き經營組織をもつ売藥業では富山平野から売藥商人が定期的に出発する行商時期を基準にしてこれを大別すると二つの型が得られる。一つは平野の自然環境によつて規制される行商であり、他は行商地域における地理的經濟的事情に關係するものである。北陸の積雪地帯においては、冬季の根雪期間が長く、特に低湿地の多い此の平野では裏作は極めて困難であり、米の単一栽培が卓越している。現在富山県の耕地面積七九、〇〇〇町步の中、水田面積は七三、〇〇〇町步であつて耕地面積に対する水田面積の比率は九二%の高位にあり、全国第一位の比率を占め、米は農業總生産額の中八〇%に達している。此処では雪解けから田植期、又成熟期から秋冷への期間が短かく限定せられ、農繁期は春と秋に急速に進行して來るので、農閑期と農繁期の労働力の過不足の差は二毛作の可能地域に対して比較にならぬ程に著しく大きい。農繁期には売藥商人の労働力の農業への導入が要求せられ、それだけ行商時期が制限せられる様になると共にこれを除いた農閑期を利用してその過剰分の労働力を吸収消化するために行商に出ると云うのは前者である。これに対して行商地域の地理的經濟的情勢を顧慮すれば、行商先における農繁期を避け、販売、集金の好期を把握しなければならない。農産物を貨幣に換えた收穫直後の有效需要の豊かな時期を捕えるとか、漁場では漁獲期、商業地域或いは住宅地域では売上高の多い時期或いは俸給日の直後などを正確に認識して、この様に行商先についての地域

性を分類設定した上で比較考慮の結果行商に出ることが必要とせられる。従つて氣候の差を利用して例えば山陽と山陰の中の一定地域を行商する様に、南北性に於いて行商地域を構成する者、或いは然らずして同一の氣象条件の地域であっても、土地利用、特にその中で卓越する職業の種類による職別地類性—例えば農業、漁業、林業、商工業等の卓越的地域によつて分類される農業地、漁業地、林業地、商業地、工業地、鉱山業地、住宅地や行楽地及びこれらの競合地などの地域差を認識して行商する者が後者の例である。此の意味において優れた売薬商人は地域性のよき理解者でなければならぬ。

(四) 更に注意すべきは行商地域の拡大についてである。徳川時代には、北は松前から南は薩摩に至る本州の全国諸領地と伊豆大島、琉球、隠岐、壹岐、対馬、佐渡島などの近海の島々に延び、現在に至つてゐる。明治時代に入つて日本人の海外發展が次第に進むにつれて、朝鮮、中国、台灣、マライ、ビルマ、インドネシアなどの東南アジアの諸地域や、ハワイ、合衆国、メキシコなどの太平洋沿岸の諸地域、更にはブラジルなどの移住地に支店を設けて、売薬を輸出し一般販売を行つた。かかる趨勢からして遂には「日本人の住むところ富山売薬あり」とまで称せられる位に、人々に親しまれて市場を拡大し、更にこれら南方や中国の方面では原住民の間にも販路を開拓しつゝあつた。この様に徳川の鎖国時代にはその市場範圍の限界は全国的に浸透膨張しながら、行商圏を形成してゐた。(開国後には民族的拡大に平行しながら市場範圍を海外に伸張して、本質的な行商とは異なる経営形態の徴象を萌しはじめていた。)行商圏とは年々定期的に一回乃至數回行商する得意先の地域の圈性であるが、かかる行商圏をもつて現在に及んでいる富山売薬業の様な産業は、世界にその類例を見え出す事が必ずしも容易ではないように思われるのであつて、極めて特異な存在と云わねばならぬ。<sup>(10)</sup>

富山売薬業は右に見られるような性格をもつが故に、それは大別して二つの構造契機から成立すると云える。即ちか

かる職業形態を生むに至つた富山平野の地域構造乃至その地域的経済構造とその市場をなす行商圏の構造と云ふ両契機の相互媒介的、綜合の上に組立てられて展開している。茲において両者を夫々分析し、その形成契機を時間的、空間的に綜合することによつてこの地域的産業存立の具体性が把握されると思ふのである。

ところで我々に示される資料は恰もこの縦糸と横糸の編みこまれて結果された織物の如きものに外ならないのであるが、行商人は元祿年間、富山藩において「大国は二人、小国は一人の比例をもつて各地に販売せしめ遂にこれを全国に布いた」<sup>(11)</sup>のであつて、文化年間一、七五四人、明治三年二、六〇〇乃至二、七〇〇人、<sup>(12)</sup>明治二〇年頃五、九〇〇人、昭和五年一、七五〇人<sup>(13)</sup>を数え、戦時中は応召、徴用のために一時的に減少したが、現在はほぼ旧に等しい人数に回復している。又行商先の各地から持参する年集金額は天保年間五万両、文久年間は二十万両、<sup>(14)</sup>明治三十九年二五〇万円、昭和元年二、七〇〇万円、戦後の二十五年は五十億円に上ると記されているが、實際額はこれより遙かに上廻るものと推察される。以上の記述から理解される様に売薬業は長い伝統を受けて堅実に富山平野に根を下しているものであつて此の地方の人々の生活に重要な役割を演ずるものの様である。この盛衰は当該業者のみに係わる事柄ではなくて直接間接に關与する一連の諸産業—例えば包装用雑品、行李の取扱業、製罐製壘業や業者の投資する諸産業乃至農業の経営規模とか、多角経営化の未発達等に影響が及び、これが其の成立の基盤になつている富山平野の地域的産業構造にも大きな關係を果すものである事が知られる。しかも売薬業の發展は全国的な市場状況の如何に依存して其の展開、変遷と云う我国経済發展の一般情勢によつて直接的に影響されるが故に、売薬業を究明する事を通じて我国経済構造との關連における此の地域の経済發展の産業構造的分析乃至経済構造の特殊性の把握が可能になるわけである。我国当面の重要課題である国土の綜合開發の發足乃至産業の再編成計画の進展に伴つてその構成分子を形成すべき社会乃至地域経済の問題が相平行して重要となつている時、例えば或る一つの県の地域の構成について、或いは隣接地域を含めて北陸とい



う積雪地帯についての産業構造の發展乃至その構造類型を究明する事が当然に要求されるものと思われる。而してこれと共にかかる地域社会乃至經濟の研究には、そこに見られる生活様式を單に視覚的な景觀としてでなく、そこに支配している生産關係、社会關係との關連において取りあげ、世界史におけるその地位を設定することが不可欠の要請である。以下の諸論稿に於いては、此の種の問題への接近を計る爲めに、一因子として富山平野について、其処に存立する売業の發展過程を追求分析する事において、其の過程に現われているこの地域の自然環境と經濟生活との可變的な相互關係を明らかにし、以て此の地域の經濟的特性及びその史的展開を明確にしたいと思うのである。

註(1) 統計不備のために得られた数字は確実でない。左の夫々の上段は富山県業務課其他關係機關での調査(昭和二十三年

度)、下段は広貫堂昭和二十二年調査であり、別掲の地図は上段を主とし、下段及び業者の意見を参考にして作成したもので大体的姿を一応示したにすぎない。

富山	二、〇一〇人	一九八二人	宮川	一一四人	不明
(東岩瀬)	二五〇	二三〇	三郷	七五	〃
(浜黒崎)	一五〇	一四二	八幡	一一七	〃
水橋	一、〇〇二	八八二	片口	六五	〃
滑川	九〇〇	一、一〇七	堀岡	六〇	〃
浜加積	一〇五	?	本江	一七九	〃
中加積	一二二	二八五	下村	一〇九	〃
西加積	一三七	?	大島	九五	〃
上市	二四〇	六〇七			
四方	四三五	五五三			

小 杉	四六	四二一
海老江	一二八	五二二
高 岡	一〇六	二一四
中 田	七三	三〇八
般若野	六二	?

(2) P. Schmidt : Einführung in die allgemeine Geographie der Wirtschaft. 1932. S. 5.

(3) 石井逸太郎教授・富山県新誌一五頁

(4) P. Schmidt, a. a. O. S. 8.

(5) E. Huntington, Principles of Economic Geography, 1940 p. 635~8. ハンチングトンは活潑な商業活動の地理的条件として、第一、生産用財貨の得易いこと、第二、輸送費の低廉、第三政治的制約からの自由、第四、人口の稠密性、第五、人間の活動的性格をあげている。

(6) 宮本又次博士、植村元覚・大阪市東区史第三卷経済篇、商業の部三七一頁

(7) 例えば小牧実繁博士は「仏蘭西オアンザ地方行商の起源と発達」(地理学講座第十四回機関誌地理三の二)同行商の衰頹を招くに至つた原因を挙げて、鉄道が開通し、道路が開け交通の便が次第に良くなり各地方への入込みが容易となつたとせられる。

(8) 堀江保蔵博士・近世日本の経済政策二六頁

(9) 拙稿・富山壳葉業の発展傾向(経済史研究、昭和十四年五月号)

(10) 拙稿・富山壳葉業の歴史地理的研究序説(「自然と社会」一九五〇、第五・六合併号——北陸三県地理学会発表要旨)

(11) 越中史料卷二前田家乗六七一頁

(12) 城宝正治教授編・富山壳葉業史史料集(高岡高等商業学校十周年記念出版)三三八頁

## □ 研究方法論——特に原理的考察

以上に於て売業行商圏成立の研究の手懸りを探索するために、富山平野に立地する売業業及びその発展について経済地理學的視角より概括的に把握した我々は、次にこれを研究する方法論に關して極めて簡單ではあるが、当該問題究明に必要な範圍において、その原理的立場を明らかにしようと思う。

經濟現象の歴史過程における自然環境のもつ意味はゴードン・イーストの述べる様に素朴な環境論者が信ずる程に絶對的でもなければ、自明的であるとも限らない。<sup>(1)</sup>それはフエーヴルがブラーシユを引用して述べる言葉を引き合にするまでもなく、「歴史を地理によつて説明しようと企てる爲の事ではない。そんな事は歴史の説明において地理を度外視して済まそうとするのに劣らず道理に反するであろう」。<sup>(2)</sup>小原教授が適切に次の言葉で示される様に「自然的所与や自然力が何らかの独立した仕方では歴史発展の決定者として作用したと考うべきでない事は言うまでもない。其の様な自然条件は、歴史発展に対する他のより決定的な要因と緊密に絡み合いながら、或る場所における歴史的事實の具體的形成の一つの要因として作用するのである」。<sup>(3)</sup>斯る立場によれば歴史を造り乃至は動かす決定的契機は歴史其のものの中に内在する法則であつて、自然環境は飽くまで其の一個の条件に外ならないのである。此の事は例えば米作地帯の我が国、就中北陸の如き米の單作地帯の村落を研究した場合について、其の家族中心主義的性格の著しい事を見出してその由来を、自然環境との關係から抽出する部類の思惟様式を反省し、批判するだけで十分了解される。成る程稲作地帯では、狭小な面積に夥しい食糧が得られ、人口が稠密であり、これに連關して稲作には反復的な多量の然も注意深い勞力と灌溉、田植、收穫を基礎とする協同作業が必要であり、更には数多い山岳と急流によつて小地域に区画された我が国の集

団は相互間の接觸交渉は頻繁ではないので血縁的、地縁的共同体としての性格を帯びるが、灌漑治水は黄河の如きそれとは規模において比較にならぬものがあつたのでアジヤ的な專制君主も出現せず国家と民衆との離反という形ではなくて家族や部落の農業労働の集中をめざす強固な構成とその發展度合の制約性が特色を爲しているのであるが、この事実から地理的条件と其れに促がされた農耕様式乃至其の歴史的發展との間に因果關係の存在を直ちに認めるならばその際に犯し易い自然環境の作用乃至その意味を誤つて過大視する態度について反省と吟味が与えられることが必要である。<sup>(4)</sup>

稻作地帯では家族的組織乃至其の發展を維持する作用があつた事を説明する一つの因子は認められていいであろうが、米作を行う他の国では例えばアメリカにおいては耕作は大規模で機械化され、粗放的であるが人力蓄力の代りにトラクターを使用し、高度に企業的な農場經營の様式で栽培されている事例を見逃がしてはならないからである。自然的影響は肉体的、精神的、社会的且つ政治的な人間の上に精神そのものの産物、芸術上の創作、天賦の特質にさえ加わるとたやすく結論する者があるが、彼らはフエーヴルの言う様に「それを事実として断言し、要請はしても証明立てる事はないのである」との表現はこの際参考にされていいと思う。<sup>(5)</sup>

だからと言つて歴史の展開過程における自然環境の意味は決して輕視されてはならない。<sup>(6)</sup>我々はその中で生活し、我々を在らしめる環境を欠いては一瞬も存在できない。しかも我々の中に又周囲に自然の樂園を発見したとしてもこれを以て直ちに自然の影響と認めようとする事は余りにも素朴な態度であると云えよう。人間は自然の中で、土壤と氣候の二つの其の支配的契機によつて作用を受けると共に、自覺的な人間は自然に適応し、又働きかけてこれを克服して自らの生活を創造していく存在であり、この活動が歴史的行為と称せられる事は既に衆知の通りであるが、此の様に人間生活が織り込まれている環境との関連において成立する歴史的展開については、フエーヴルは「大地と人類の發展」において原理的に追求している。何よりも優れて方法論的な批判の書である此の名著は、副題を「歴史への地理学的序

説」としてある様に、自然環境と社会的歴史的存在としての人間、地理と歴史との関係という問題を基本的態度において取り上げた。彼自身の言葉をもつてその趣旨を語らせよう。

「我々は史料から人類発展の歴史的分析について期待すべき事は、人間の発展において土地によつて果された役割についての知識ではなく、又自然的条件が時代の移りいく間に人間の運命や歴史に爲し得べき影響でもない。然らずして人間或いは社会集団が環境に如何なる行爲をすることが出来るか、又實際爲したかを決定する際に助力して貰うことである。」<sup>(7)</sup>

彼の意味する所は、人間に於て地表を変更させるように働く強力な作用因子は何であるか、更に言えば創意と移動性を与える人間に於いて自然環境が如何なる仕方で見られるかを研究しようとするのに外ならないのであつて、空虚な單純な空間そのもの、謂わば人間から孤立化した自然を變容するのではなく、自己の発展により新たな自然環境を自ら創造すると言う事であらねばならない。従つて自然環境の側から云えば通説の如く「顕現さるべき可能性を内在する自然」ではあるが、其の意味即ち人間に対する關係は歴史的行爲乃至過程を考察する事によつて始めて把握され、歴史に於いて不斷に發展していく自然、従つて「彼岸」の自然ではなく人間の側に引寄せられた歴史的自然として把握される。

この故に地域の發展は自然の「歴史性」乃至人間化された土地「The Earth humanized」<sup>(8)</sup>の觀念から理解されるべきものである。斯くて此の態度を評して若し、ラッツェルの決定論に対する反駁であるとしてその對蹠的な學風に押し込めようとするならば、それは思惟を余りにも簡易化して結論を急ぐ解釈であるばかりでなく却つて論者自身の囚われた先入觀念を表示する事になる危険を含んでいるといえよう。成る程ラッツェルにおいては歴史への地理學適用の諸原理を探求して歴史運動を嚴重に決定する環境論的自然として問題を提出するけれども「人文地理學」上卷の「歴史に対する自然の影響の變化」の項で次の如く述べる。「人間は明らかに他の動物よりも自然の制約を脱している。然し人間が斯る

制約を脱すると言う自由を獲得するのは彼を圍繞する自然が供する手段を適當に利用した場合のみであり、根本的には自然の賜物に外ならない。……人間の歴史の本質が人間をして依然動物たらしめている肉体より次第に解放されていく事を内容とするのであれば人間の進歩は単に自然の内部においてのみでなく自然を利用して始めて實現するものなのであり、人間の性質には多様の意味に於て自然の影響が烙印 *ihren Stempel aufgedrückt* されている。人々は一般にその基礎である環境乃至自然から次第に解放されていくとするならばそれは誤りであろう。文化発展の大部分は自然条件の利用の進歩を内容とし、其れに依て人間と土地との關係が密接になるのが原則である。一般的に云つて文化が進むにつれて土地の人間に対する影響は強化するとさえ言えるのである<sup>(9)</sup>。かゝる意味における環境としての自然と人間との交渉に關してフエーヴルが対決せしめられて決定論への讃否の形において起される様な問題として自然環境論が通説に於て取扱われるのは尙前代の遺風であるとしても果して二つの対立的傾向が両説の本質を示すか否かは充分に吟味されなければならぬ。斯て「ラツツェルの立場に対する本質的な分析としては自ら別の方法がある筈であり、後者の立場を前者の決定論に対する面からのみ理解させ、之を單なる可能論として把握しようと考へさせる惧れがあるならばそれは甚だ當を得ていない<sup>(10)</sup>」と言われるのも故なき事ではない。

富山飛葉業の存立、發展を自然環境との關係から明らかにせんとする我々は、茲に於て甚だ簡單ではあるが右の基本的原理問題を示す事例について尙一言触れてみよう。此の方法論立場の優れた先驅的な著述を我が國に於て求めるならば、中島健一教授の「英國史への地理学的序考」(昭和十八年刊行)を見出すことが出来る。英國と云う島嶼の自然的環境が数次にわたる氣候的变化に隨順して変容したその姿態を明らかにし、かかる変遷する自然環境に當該時代の住民達は夫々如何に適應してその經濟生活を展開したか、又如何なる過程を経て各々地域的な特殊性を表現したかを数多くの典拠によつて興味深く論じている<sup>(11)</sup>。歴史地理学を志向する著者は、人間存在が時間的、空間的構造として統一されて

いるとの考えをもつて、英国經濟の変遷を探らうとする本書の構成を貫き、特に古代、中世の社會經濟についての歴史地理學的研究に一つの示唆を与えているのであつて、自然を客觀的な實在としてではなく人間存在の構造に根ざすものと理解する態度は高く評價されて良い。しかしながら尙も其の根底には、不變にして歴史を方向づける自然の觀念が清算しきれないで残つてゐる節を若干ながら見逃がしてはならない様に思う。此の事を我々は自然的基礎を歴史性に先行させる様な議論の展開の仕方に汲み取る事が出来る。其の最後の節において、「英國の氣象的諸条件はその位置及び地體的構造の影響を受け、その氣候と地體構造によつて規制された土壤は植物景觀、動物景觀を決定する。これが人間の原初的な自然の環境であり、又これこそが英國の性格を基原的に表出するものに外ならぬ」と結論する時、自然は歴史の根底に横わる恒常者としての「歴史の規定者」の如くに見られるのであつて、回避しようと志しながら、再びかつての決定論的思維様式に逆行する危険を自らに秘ませていると言わざるをえない。この故に歴史或いは文化の類型は自然環境の類型から求められ、高地地域と低地地域の地體構造の差異に基づく二つの文化的性格が論じられると云う風になつてゐる。歴史の理解の爲めに觀察した筈の自然は尙客觀的な存在としての自然であり、歴史とは内面的に連關しない夫自身として存在する自然であつたとも言える。思うに決定論的な立場に於ては両者は互に關係づけられないまゝに一つの全体に押し込めて理解し統一して了おうとするところに基本的な欠点があつた。二つの別個な存在が、この爲めに互に外側から縫い合わされたにすぎないのであつて、この縫い結びの役としては先驗的な他人相関の合言葉以外には何ら兩者を言葉の眞の意味で綜合する様な高次の原理を持ち合わせて居なかつた。然も地人相関なる原理は自らに説明されるものではなく、此の原理に従つて解釈した所の諸事實をもつて再び其の原理の合理性を主張しようとする、言わば「自分の尻尾を食へる蛇」となり終る悖れを強く含むのである。此処では兩者の混在乃至混交が在るのみで、自然夫れ自体と人間夫れ自身の部分的知識が互に得られたとしても、人間歴史の全體的構造を明らかに爲し得べきものでな

つた。

我々の關心はその中でとりわけ經濟的時間に對する經濟的空間の關連の問題であるが、それは寧ろ前者との綜合的連關に於ける後者の意味を究明することである。而して經濟的空間における地域經濟について特殊的性格を強調する理論的基礎として自然環境の問題が主要なる論議とせられる事には異論は在り得ない。經濟生活は人間の生存のために必要な手段の生産交換及び分配を計る基礎的な生活面である。肉体に於いて生きる人間は心的物的生命統一体として生命保育の爲めに諸物資を調達するのは基礎的に重要であり、それは一般的には肉体を通じて外界を認識し、理念をもつて外界なる環境に働きかけ自己の發展によつて環境を創造する。これは最高次元において労働を通じて行われ、労働は生物學的概念における自然を歴史的な自然へと生態的に具体化する根源的な歴史的社會的契機であつて、自然は労働において經濟生活と交渉を持ち労働生産力において始めて地域的な「統一物」としての自己を見出すのである。地域的自然を創造するために、人間は労働要具として道具を工夫しそれによつて自らの肉体の制限された能力を延長拡大せしめるが、道具は斯く作られるが故に又歴史的社會的所産であつて、人間の労働諸過程を地域的に特徴づけると共に、それを作つた環境を弁証法的に越え行こうとする<sup>(14)</sup>。人間は地表の場所に準じて「變化に富んだ表現」を与える有力な工匠であると<sup>(15)</sup>言われるのはこの故であつて、其の「社會の存在に連關する自然は凡ゆる人間的接觸から獨立した自然ではなく」、又その干渉の痕をとどめていない土地は殆んど全く存じない。かくて自然は人間との關連の在り方では、「關係 relations<sup>(16)</sup>の問題であつて影響 influences のそれではない。人間社會と地理的環境の間の關係の究明こそ基本的問題なのである」。斯く經濟は自然環境に依拠しており、經濟生活はこれを離れて成立しえない不可欠なものであるが、手段的なものであり、生活は同時に即自然ではないから、經濟は自然條件に依存關係を保ちながらそれ自体の原理を持ち、特有の歴史をそこにおいて自ら形成するのである。又自然は社會的労働生産力の基礎的条件であるが故に自然の豊饒なところは必ず



しも労働生産力の最も大きい乃至文化の發達した地域とは限らない。生産の可能性を与えるに止まり、現実化するのには社会的労働乃至歴史的行爲たる基礎的実践による者であり、自然環境の具体的内容は此によつて違つて規定される。

經濟立地の研究は自然的条件の場所的分離から出發するとしても、この様に労働過程としての社会的生産の歴史的發展を重視するからと云つて、ヴィットフォードの如く歴史と地理との間に生産力なる中間項を置いて、そこで自然と社会との間に交互作用が営まれ、この際自然は基礎的契機として生産力の發展に關与し經濟の歴史的發展段階に應じて其のもつ意味が種々に現われるとする方法論的態度を忠実に祖述するものではない。彼は經濟機構と歴史の経過の裡に具体的な發展の理解を試みんとするが、歴史的發展の各段階における生産過程の分析は成る程極めて必要なのである。

しかし自然条件は特定の生産力發展段階にある社会に對し、一定の經濟構造乃至生産關係を与え、生産力の社会的發展とその矛盾的自然制御的發展とは互に手を携えて進行し、生産技術の發展するに伴つて自然的契機の意味は相對的に小さくとなると經濟發展の立場に注目する結果、地理をば歴史に還元して了う事になる惧れを含むのであつて、その形而上的唯物論の思惟様式に我々は無条件的に組みするものではないからである。夫々の相異なる自然環境乃至自然類型を對象として、地域的社会乃至經濟をその自然環境との關係において歴史的自然的理解態度から把握する事が、無媒介なる對立の直接的統一のために必要である。斯くて自然環境のもつ意義は時代々々によつて原理的に異なるものでなければならぬが、此の様な考え方は實は自然環境を人間或いは經濟の歴史の中の正しい位置において眺めんとすることに外ならない。

徳川の中期において北陸の富山に売薬業が成立し全国的行商の形で發展したと言う歴史過程は、此の様な關連を極めて明瞭に示している。我々はこの過程を以上の様な原理的方法論の視角から吟味しようとするものである。

(一) G. East: The Geography Behind History. 小原敬士教授訳「世界史の自然的基礎」一三〇頁

- (2) Lucien Febvre : *La Terre et l'Évolution Humaine, Introduction Géographique à l'Histoire* 英訳 *A Geographical Introduction to History*. P. 61.
- (3) 小原敬士教授・「ランカシヤ木綿工業の発展とその歴史地理的条件」(社会経済史学昭和二十五年十一月号)
- (4) Febvre : *ibid.* P. 45 における彼の考え方はこれを示していると解せられる。
- (5) Febvre, P. 14 この文に続いて「かかる多数の事実を説明すると一般に思われる地理学は実は何一つ説明しないと言ふべきではないか」と地理的影響の濫用と野心を吟味する。
- (6) 例えば堀江保蔵博士は「歴史的に見たわが国民生活構造」(「人文」二の二)において、我が国の封建制度は氏族制度の発展形態であると共に更に小地域の地理的環境の故に単なる君臣主従の身分関係による結合体たるに止まらず、地域の要素が織り込まれてそこに領域国家、領域経済が成立したとされる場合の歴史過程における自然環境のもつ意味は巧みに表現されている。
- (7) Febvre, P. 64
- (8) Febvre, P. 8
- (9) Fr. Ratzel, *Anthropogeographie* 22. Die Veränderung der Natureinflüsse mit der Geschichte. S. 40.
- (10) 飯塚浩二教授・人文地理学 七九頁
- (11) 中島健一教授・英国史への地理学的序考 特に第一、第二章
- (12) 同書 九七頁
- (13) 木村素衛・表現愛二八頁
- (14) 西田幾太郎哲学論文集 第七卷 一四頁
- (15) Febvre, P. 360
- (16) Febvre, P. 361
- (17) K. A. Wittfogel, *Geopolitik, geographischer Materialismus, und Marxismus*, 1929. S. 515. 坂田吉雄抄訳(風土政治学)(思想)